

“坐”(すわる)が“乘”(乗る)になるまで

古橋ふみ子

要旨 中国語の“坐”には「座る」意味と同時に「乗る」意味もある。果たして“坐”はもともとはどういう意味だったのか。もとの意味は地面の敷物の上に両膝をつき尻を踵の上ののせた姿勢であった。やがて、台や椅子に腰掛け、それから椅子付きの“轿子”(輿)、さらに花嫁の乗る“花轿”に腰掛けて移動することから「車に座って乗る」意味となり、“坐”が「乗る」意味へと転じたことを考察した。すなわち、“坐”の本来の意味から、「腰掛けた楽な状態を維持したまま乗り物に身をまかせて目的地まで行く」という意味が派生して「ゆったり、くつろいだ」状態で移動すること、つまり「乗り物に乗って移動する」意味が生じたと考えられる。

本研究はおもに古典や辞書から“坐”の意味の変遷を追い、如何にして「乗る」意味になったかを論述した。

キーワード 跪く 座る 乗る 輿 車

提要 現代汉语の“坐”一词，既有“坐”意又有“乘”意。“坐”原本表示何意，又是怎样产生“乘”意的呢？本文通过史料及辞典考察了“坐”的词义变迁。首先我们找出了“坐”的原始意，它最早表示“以两膝着席臀部压在脚后跟上”，即“跪”意。之后随着坐具的变化，又表示“搭坐”在榻和椅子以及带有椅子的轿子和新娘乘坐的花轿上。由于轿子是移动工具，于是“坐”就有了“移动”意，从而产生了“乘坐于车”之意。也就是说，由“坐”的基本语义派生出“使身体保持放松状态任凭交通工具将自己运送到目的地”之意，而产出了“乘”意。

关键词 跪 坐 乘 轿子 车

はじめに

「“坐”は花嫁が座って乗る〈輿〉が起源である」ことを聞いて、輿とは底面に座って乗るものと思い込んでいた筆者にとって驚きであり、興味深い話だった。輿の中に椅子があり、椅子に腰かけた状態で移動する。そこから「乗る」意味が生じた、とする説である。“坐”にはそもそもどういう意味があるのだろうか。

《現代汉语词典》第6版（以下《現漢》とする）では、“坐”は“把臀部放在椅子、凳子或其他物体上，支持身体重量”（おしりを椅子などの物体にのせ、からだの重量を支える）ことであり、また、“坐船”（舟に乗る）、“坐火车”（列車に乗る）のように、乗り物に乗る時にも“坐”を使うとしている。

一方、《汉语大词典》（以下《大词典》とする）では次のように記述している。“古人铺席于地，两膝着席，臀部压在脚后跟上，谓之“坐”。后来把臀部平放在椅子，凳子或其他物体上以支持身体称为“坐””（昔の人は地面にごごを敷き、両膝をごごにつけ尻を踵の上にした、この姿を“坐”と言う）とあり、“把臀部”以下は《現漢》と同じ意味で、さらに「乗る」意味も挙げている。

現在“坐”は「座る」意味であると同時に「乗る」意味でもあるが、もとの意味は地面の敷物の上に両膝をつき尻を踵の上にした姿勢を言った。そのような姿勢から台や椅子に腰掛けて座るようになり、やがて椅子付きの“轿子”（輿）、さらに花嫁の乗る“花轿”から「車に座って乗る」意味となり「乗る」意味に変化したと筆者は考えた。中国語で「座る」がどのような過程を経て「乗る」意味に転じたのか考えてみたい。

1. 古典にみる“坐”

1.1 『大漢和辞典』の“坐”

『大漢和』では「すわる」意味を最初の項目に挙げ、続いて「とどまる」「ひざまずく」「すわりばしょ」「神仏の席」「守る」「よる」「罪におちいる」

“坐”(すわる)が“乘”(乗る)になるまで

「うったえる」「いながらに」「そぞろに」などの項目を挙げている。「すわる」の項目では、《日知録》から以下の用例を引いている。(下線と注のない訳は筆者。以下同様。)

(1) 《日知録》雑事・坐

古人之坐、皆以兩膝著席、有所敬、引身而起、則為長跪矣。

(昔の人が座るときに、みな兩膝をむしろにつけ、敬う人がくれば、体を伸ばす。これが長跪である。)¹⁾(図1参照)

“則為長跪矣”の“長跪”はさらに『大漢和』では次のようにいう。

体をのばしひざまずいてする礼。尻を跟の上に載せて坐るを跪といい、尻を上げ腰を伸ばした姿勢を長跪という。敬意を表す体勢の一。

この姿勢は、いわゆる正座ではなく、つま先を立てたかかるとに尻をのせて、腰を伸ばした状態である。この姿勢は相手に敬意を払う時の姿勢である。

“三跪九叩”²⁾ということばがあるが、この“跪”がまさにその「ひざまずく」姿勢である。清朝皇帝の前で臣下がとる最高の礼だが、1793年イギリス政府の使節団として乾隆帝に交渉を申し込んだジョージ・マカートニーはこの儀礼を拒否し、ヨーロッパ流の方式で通したが、あくまで貢使として扱われ貿易制度の改善や国交を開くという交渉には至らなかった³⁾。

『大漢和』では他に《積名》と《漢書》の用例を引いている。

(2) 《積名》積姿容

坐、挫也、骨節挫誦也。

(坐とは折り曲げることである。関節を折り曲げて誦^{かが}むことである。)

(3) 《漢書》東方朔伝

男女雜坐。

(男女入り乱れて座る。)

(1)で《日知録》の用例を挙げたが、黄汝成の《日知録集釈》下をみると、

1) 訳は清水茂『中国文明選』(1974: 431)を参考。以下(4)、(5)の訳も同様。

2) 清朝の敬礼法。三たび跪き、九たび頭を地につけて拝する礼(『大漢和』)。三跪九拝とも言う。

3) マカートニー著、坂野正高訳注『中国訪問使節日記』(1975: 320-321)。

(1) の他に以下のような用例もみえる。ここでの用例は両膝を地面にひざまずいた形、つまり、いわゆる正座（端坐）の形になる前の、足の甲を地面につけないで両方のかかとで尻を支えて座る形の“坐”である。では《日知録集積》の“坐”をみていこう。

1.2 《日知録集積》の“坐”

(4) 古人席地而坐，西汉尚然。《汉书 隽不疑传》：登堂坐定，不疑据地曰“窃伏海滨，闻暴公子威名旧矣”是也。（《日知録集積》）

（昔の人は地面にむしろを敷いて坐った。西漢でもそうであった。《漢書》隽不疑伝に、次のようにある。堂に登って坐につくと、不疑は地面に手をつけて言った。「ひそかに海辺に隠れ、暴公子様の威名を前から聞いていました。」とあるが、このことである。）

さらに、《史記》范雎伝、《補梁孝王世家》、《礼記》、《三国志》を引用して次のように述べている⁴⁾。

(5) 古人之坐、皆以両膝著席、有所敬、引身而起、則為長跪矣。《史記》范雎伝：言秦王踞而請，秦王復踞。而褚先生《補梁孝王世家》：帝與梁王俱侍坐太后前，太后謂帝曰：“吾聞殷道親親，周道尊尊，其義一也。”帝跪席拳身曰“諾”是也。《礼記》：坐皆訓跪。《三国志注》引“高士伝”言：管寧嘗坐一木榻，積五十余年，未嘗箕股，其榻上当膝處皆穿，以此。（昔の人が坐るときは、みな両膝をむしろにつけ、敬う人がくれば、体を伸ばす。これが長跪である。《史記》范雎伝に、「秦王がひざまずいて頼んだ」「秦王またひざまずいた」とあり、また、褚先生が補った《補梁孝王世家》に次のように言っている。「皇帝と梁王とそろって皇太后の前に坐っていた。皇太后は皇帝に言った。「殷の道は近親を親しみ、周の道は尊者を尊ぶが、その意義は同じだ。」皇帝はむしろにひざまずき、体をあげて言った。「かしこまりました。」とあるのが、それである。《礼記》では坐をことごとく跪と言う。《三国志》の注に《高士伝》

4) 最初の部分、“古人之坐……則為長跪矣。”までは(1)と重複。

“坐”(すわる)が“乘”(乗る)になるまで

を引いて言う。「管寧はいつもひとつの木の台に座っていたが、五十年あまりもの長い間、足を投げ出して座ることはなかった。その台には膝の当たる所がへこんでいた。」これは両膝をそろえて台につける座り方をしていたからである。

(4)の“古人席地而坐”、(5)の“皆以両膝著席”の“席”は、むしろ、ござ、あるいは敷物を指している。古代では地面に直接むしろや敷物を敷き、その上にひざまずいたり座ったりした。

(5)に“坐一木榻”、“其榻上”とあるが、“榻”に複数の人が並んで座ったという記述が《世説新語》中・方正第五にある。次にその用例を挙げる。

(6)《世説新語》中・方正第五

杜預拜鎮南將軍、朝士悉至、皆在連榻坐。

(杜預が鎮南將軍を拜命すると、朝士達は皆集まり、長椅子に座った。)⁵⁾

(5)(6)の“榻”は、長椅子のような、日本の縁台⁶⁾のようなもので、その台の上に腰かけるのではなく、“席”に座ると同じようにして座っていた。(5)の“《三国志注》引《高士伝》言”は「座る時はいつも両膝を台に押し付けていたので、台がへこんでしまった」と述べている。この頃になると、“坐床”⁷⁾が登場する。“榻”とほとんど同じもので、現代の“床”(ベッド)の原型であると考えられる。

《古汉语常用字字典》も《大词典》と同様、“坐”を次のように記している。

(7) 古人铺席于地，两膝着席，臀部压在脚跟上，叫做“坐”。

(昔の人は座るとき、地面にござを敷き、両膝をござにつけて尻をかかとのにせた。その動作を“坐”という。)

“坐”はいずれも地面に直接か、あるいは敷物の上に両膝をひざまずいた形としているが、“榻”や“坐床”が登場してからは、地上に座る習慣から台の上に座る習慣へと変化が起きた。

5) 訳は目加田誠『新釈漢文大系』世説新語・中(1976:372)を参考。

6) 茶店の店先、また住居の庭先や路地などに置く、木や竹などで作った細長い腰掛け(『大辞泉』)。

7) 《大词典》では“指坐具”(坐具をさす)とある。

《礼記》曲礼篇上には“坐”の用例がいくつかあるので次に挙げる。「ひざまずく」から足の甲を地面につけて座る形の「座る」意味へと発展させた用例である。

1.3 《礼記》の“坐”

- (8) 並坐不横肱（並んで座る時は肱を横に出さない）⁸⁾
- (9) 授立不跪、授坐不立（立っている人に物を渡すときは跪かせず、座っている人に渡すときは立たせぬようにする）
- (10) 坐而遷之（跪いてこれを移す）

1.1で“坐”は「両膝を地面あるいは敷物の上にひざまずいた形としている」としたが、踵をうかせたままの姿勢で飲食をしたり、談話をしたりするとは考えにくいので、《礼記》の“坐”はいわゆる正座と同じ座り方か、あるいはそれに近い座り方をしていたとも考えられる⁹⁾。

次に、同じく《礼記》の“玉藻篇第十三”から「座る」意味の“坐”をみる。

- (11) 徒坐不尽席尺（席に就くときは必ず一尺あけて座る）¹⁰⁾
- (12) 退則坐取屣（退出するときは跪いて履を取る）
- (13) 坐左納右、坐右納左（左を跪いて右足をはき、右を跪いて左足をはく）

『新釈漢文大系』では(10)(12)(13)の“坐”を「跪く」と訳している。(5)の《礼記》を引用した部分で、顧炎武は“《礼記》：坐皆训跪。”（《礼記》では坐を皆跪くと言う）としている。(10)の“坐”は「行く手に物があるのでそれを持って脇にうつす」動作であり、わざわざ正座、あるいは正座に近い座り方をするまでもなく、「跪く」（ひざまずく）姿勢で物を移動させる動作

8) 訳は竹内照夫『新釈漢文大系』礼記・曲礼上第一（1971：25）を参考。以下(10)まで同様。

9) すでに B.C. 13～B.C. 11 に正座していたと思われる女性の像がみられる。《中华文明大博覧》上（妇好墓出土玉人）（1997：72）（図2参照）。

10) 訳は竹内照夫『新釈漢文大系』礼記・中（1971：460, 462）を参考。以下(13)まで同様。

“坐”(すわる)が“乘”(乗る)になるまで

であると考えられる¹¹⁾。また、(12)は履(くつ)を取る動作であるから「ひざまずき」、(13)は片方ずつ「ひざまずいて」もう片方の足で履をはく動作である。ここでの「ひざまずく」動作は、「座る」というより、履をはく動作につながる過程の「ひざまずく」であり、席につくときは履物をぬいでいたことがわかる。顧炎武の説によって解釈すれば、(10)(12)(13)は「跪く」と訳することができる。

「座る」は膝を曲げ平面にお尻をつけた安定した状態であるが、「ひざまずく」は膝は地面につけているが、お尻を踵にのせ上体は膝からまっすぐ伸ばしたままである。不安定であり、落ち着いた状態とは言えない。「ひざまずく」は、本来は「三跪九叩」で述べたように特殊な姿勢であり相手に敬意を払う時の姿勢であると言える。

さて、古代の“坐”は地面に座る行為であったが、次第に台の上に座る行為へと移り、北方から伝わった胡牀が座る行為に大きな影響を与えた。

魏晋時代の頃には北方の騎馬民族、広くは西洋も含めて外国から胡牀(胡床)がもたらされ、腰かける行為が習慣になった。さらに胡牀は運搬に便利で常に戦地、獵場、楼上、船中のような屋外で用いられ、“榻”や“坐床”とは異なり、一人で座るものであり、座り方は腰かけて座った¹²⁾。“胡牀”の用例を《大词典》(14)、『大漢和』(15)から挙げてみよう。

(14)《三国志》魏志・武帝紀、裴松之注引《曹瞞伝》

公将過河、前隊適渡、超等奄至、公猶坐胡牀不起

(公はまさに河を渡ろうとするが、前隊が渡り過ぎても、超が防ぐのを待ち、公は依然として胡牀に座ったまま立ち上がろうとしない。)

(15)《太平御覽》服用八・胡牀

風俗通曰、靈帝好胡牀、董卓權胡兵之応也

(《風俗通》で言っている。靈帝は胡牀を好むので、董卓が胡兵に持つ

11)《大词典》では“跪”を「膝を曲げ、片膝あるいは両膝を地面につけ、尻を持ち上げる」としている。

12) 藤田豊八著、池内宏編『東西交渉史の研究』(1974: 155, 165, 167)。

てくるよう命じ、胡兵は応じた。）

ところで、古典の“坐”には「乗る」意味はないが、用例を調べてみると“乗”を「乗る」意味としていることがわかった。そこで、《礼記》の“乗”の用例をみていくことにする。

1.4 《礼記》の“乗”

- (16) 適四方乗安車、自称曰老父（諸方に出かけていく時は座る車に乗り、自分で老人と言う）（図5-1、2参照）
- (17) 婦人不立乗（婦人は立って乗らない）（以上“曲礼篇上”）
- (18) 則天子素服、乗素車（天子は白絹の服を着、飾りのない馬車に乗り）（“玉藻篇第十三”）

このように、現代中国語の“坐”の「乗る」は古典語では“乗”を使う。

ところで、『大漢和』では、「坐車」を「車に乗る」とし、『大词典』も“坐车”を「車に乗る」意味としている。しかし、はたしてそうなのか。

前漢の賈誼（B.C. 200～B.C. 168）の《新書》容経篇に車に乗る作法として“坐”の用例を挙げている。その中で“坐车”（座って乗る）と“立车”（立って乗る）を対比させている用例があるので、まずこの例をみてみよう。

2. “坐车”と“立车”

《新書》容経篇では“坐车”、“立车”を次のように記している。（対比部分に下線を引いた）

- (19) 坐乘以経坐之容、手撫式視五旅、欲無顧顧不過轂、小礼動、中礼式、大礼下。坐車之容
（坐乗する時は経坐の作法をもちい、（中略）小礼には威儀を正し、中礼には横木に手をつけて礼をし、大礼には車から降りて礼をする。これを坐車の作法という。）
- (20) 立乘以経立之容、右、持綏而左臂、詘存劍之緯、欲無顧、顧不過轂、小礼據、中礼式、大礼下。立車之容

“坐”（すわる）が“乗”（乗る）になるまで

（立乗する時は経立の作法をもちい、（中略）小礼にはじっとし、中礼には横木に手をつけて礼をし、大礼には車から降りて礼をする。これを立車の作法という。）

《大辞典》では“坐车”の項で“乘车”（車に乗る）の意味として、この《新書》容経篇の(19)の“小礼動、中礼式、大礼下。坐車之容”を用例に挙げている¹³⁾。しかし、本当にこの“坐車之容”の“坐”は「乗る」意味であろうか。

まず、(19)の“坐乗之容”と(20)“立車之容”を比較すると、“坐乘以経坐之容”と“立乘以経立之容”、“小礼動、中礼式、大礼下”と“小礼據、中礼式、大礼下”が対照的に記述され、どちらも車に乗ったあとの礼儀作法を述べている。これらは「座って乗る」「立って乗る」ということであり、どちらも「車に乗る」意味が含まれており、乗ったあとの礼儀作法を述べているのである。“坐乗之容”ひとつを取りあげて“乘车”（車に乗る）の意味とするのは適当ではない。

また、『大漢和』では「坐乗」の項で「車や船に乗ること」とし、《史記》商君伝の“勞不坐乗”や《新書》容経篇の(19)の“坐乘以経坐之容”を用例に挙げている。つまり、「暑い」と並べてあるように、“勞不坐乗”は「疲れても座って乗らない」意味である。ここで《史記》商君伝の“勞不坐乗”の前後をみておこう。

(21) 五穀大夫之相秦也。勞不坐乗。暑不張蓋。

（五穀大夫、秦を相ける。車に乗る時は疲れても座らず、暑くても覆いを張らない。）

また、(19)の“坐乘以経坐之容”は「座って乗る時は経坐の作法を用いる」という意味である。さらに、『大漢和』では「坐车」の項に「車に乗る。乗車。」とあり、《大辞典》と同じく《新書》容経篇の用例を挙げているが、これは先に述べた理由により「車に乗る」意味とするのは適当ではない。な

13) 容経篇は“経部”と“容部”とその解説の部分から成り、“容部”はさらに11項目に分かれ、“坐乗之容”“立車之容”はその“容部”の中に含まれている。

お、中国の辞書《大词典》には“坐乘”は載せていない。

以下の“坐乘”はいずれも「座って乗る」意味である。

3. “坐乘”¹⁴⁾

《四部叢刊》電子版で“坐乘”を調べると26例あり、そのなかには春秋、前漢時代の用例を後の時代に引用した例が多く見られる。そこで後の時代になって引用した用例（重複部分）や、似た用例の引用、また語彙の反切を記述した用例等は省略した。

(22) 《礼記正義》曲礼上（前漢）

男子倚乘而婦人坐乘

（男子は立ったまま車に乗り、婦人は座って乗る。）

『中国社会風俗史』第11章「周代の車馬」によると、周の時代から男子は立って乗り、女子は座って乗っていたとある。一般に男子は立って乗り、女子や老人は座って乗っていた様子は前述した1.4の(16)“適四方乘安車、自称曰老父”や(17)“婦人不立乘”にみえる。

(23) 《析城鄭氏家塾重校三礼図》（宋）

男子立乘其車有盖無帷裳婦人坐乘有盖有帷裳

（男子は立って乗る時に覆いはつけるが、帷は垂らさない。婦人が座って乗る時は覆いはつけ帷も垂らす。）

《史記》商君伝“五殺大夫之相秦也勞不坐乘暑不張蓋”は、《張状元孟子伝》（南宋）、《資治通鑑》（宋）、《山谷外集詩註》（宋）、《太平御覽》（宋）巻第204、702などに引用されている¹⁵⁾。

いずれも男子の「立って乗る」（“立乘”）に対比する女子の「座って乗る」（“坐乘”）の用例である。こうした用例から、“坐乘”は「座って乗る」とい

14) 年代と訳は筆者。3.“坐乘”、4.“乘坐”のいずれも年代順に並べた。

15) 他に《礼記》曲礼上(22)の用例と似た例や語彙の反切を記述した例などがある。また、晋、梁、唐、宋、元、清代にも用例が見られるが、主に春秋、漢時代に使用していた用例を宋代や清代になって引用している例が多い。

“坐”(すわる)が“乘”(乗る)になるまで

う“偏正”(修飾)の関係にあることがわかる。しかし、女子や老人、身分の高い男子に限らず「座って乗る」ことが一般化されれば“立乗”という言葉そのものの必要性がなくなり、“坐乗”も“立乗”と対比させる必要がなく、ともに自然に消滅したと考えられる。

4. “乘坐”

“坐乗”は「座って乗る」ことであつたが、これを逆にした“乘坐”が元代の資料からみえる。この“乘坐”も《四部叢刊》電子版で7例検出したが、そのうちの3例の用例を挙げる。

(24)《元朝秘史統集》(元)

不是緊急事務須要乘坐(緊急の用事でなければ乗らなければならない。)

(25)《王文成公全書文録統編》(明)

有事機可乘坐(機会があれば乗るべきだ。)

同文の用例が《陽明先生集要經濟編》(明)にもある。

(26)《陳迦陵文集》(清)

君馬勞不宜復有所乘坐(君子の馬が疲れば、それ以上乗っていくことはできない。)

この“乘坐”は、ただ単に馬車あるいは馬に「乗る」ことであり、古典語の「乗る→“乗”」と現代語の「乗る→“坐”」の合わさったもので、同義結合と考えられる。このことから、“坐”には「乗る」意味が生じていたことを物語っている。また、“乘坐”は並列関係でもあるが、この熟語形式の場合どちらか片方を用いても「乗る」意味になることも補足しておきたい。

ではなぜ“坐”に“乗”の意味が生まれたのだろう。これはつまり、元代以降に“坐”に「乗る」意味が生じていたと思われる。

5. 「馬車」から「輿」へ

古代の中国では「車に乗る」は「馬車に乗る」ことで、馬車は初めは運搬

具として利用されていたが、次第に戦車や交通手段へと発達してきた。しかし秦、漢時代から乗り物として馬車以外にも、「輿」（“轿子”）が一部使われ、晋代には肩でかつぐ“肩輿”が現れた（図6-1、2参照）。最初は高貴な身分の男女の乗り物として利用されたが、やがて庶民の乗り物として婚礼の花嫁の乗る乗り物として広く利用されるようになった。そこで、次に「輿」がどのように“坐车”と関りを持つに至ったか検討していくことにしよう。

5.1 「輿」

「輿」は中国語で“轿子”といい、《大词典》によると、「昔交通手段として用いられ、四角形で竹や木材を使い、外は覆いで囲い、両方にそれぞれ棒を通して、人が担いだり馬で運んだりするもの」としている。また、『大漢和』では、「内部に椅子形のもの置いて坐る」としているように、囲いの中は腰かけられるようになっていたと思われる。櫻井芳昭（2011：55）も中国の「輿」は椅子に座って乗るものとしている。

“轿子”は秦、漢時代から一部使われ始め、最初は高官や女子が使用していたが、唐代後半に入ると女子とともに高官以外の一般の男子にも広く使われるようになった¹⁶⁾。また、花嫁の乗る“轿子”は“喜轿”“宝轿”“花轿”と呼ばれ、婚礼の当日になると、新郎の家から“轿子”を用意し、花嫁を迎えに行く風習があった。《大词典》の“花轿”の項目に“旧时特指结婚时新娘所坐的装饰华丽的轿子”とあり《儿女英雄伝》第27回を用例として挙げている。《大词典》で挙げている用例以外にも“花轿”に関する箇所が《儿女英雄伝》にあるので次に併せて挙げるが、同様な記述が《現漢》の“花轿”の項目にもある。

“轿子”には中国以外に、ローマやパリ、韓国でも用いられていた記述があるので、5.2.2、5.2.3で紹介しよう。

16) 櫻井芳昭（2011：55）。

5.2 “轿子”のいろいろ

《大辞典》の“花轿”の項には、《兒女英雄伝》(1821～50)の用例を挙げている。次に《兒女英雄伝》の“花轿”の用例を挙げる。(28)は《大辞典》の用例である。なお、『大漢和』では「花轎」の用例を挙げていない。

5.2.1 《兒女英雄伝》の“花轿”

(27) “等到了吉时，人家就拿花红轿儿八个人儿抬了去了。”

(輿入れの時になったら、花紅轎が来て8人で担いで行ってくれるのよ。)

(28) “安太太走后，只听得鼓乐喧天，花轿已到门首。搭进院子来，抽去老杆，众家人手捧进来，安得面向东南。”¹⁷⁾

(安太太が行ってしまうと、鼓樂がにぎやかに聞こえ、花轎が門前についた。そして中庭にかつぎこまれ、担ぎ棒を引き抜き、召使いたちが手でささげて中に進み、東南の向きに据えた。)

(下線は筆者、訳は『中国古典文学全集』第30巻を参考、以下(29)まで同様)

(29) “拦门第二请，请新人缓步抬身，扶鸾上轿。请！褚大娘子，张姑娘扶着姑娘上了轿。”

(欄門の第二をお願いします。どうぞ新婦はゆっくりお起ちになり、手を借りて花轎にお乗りください。褚大娘子と張姑娘が姑娘の手を取って花轎に乗せた。)

《兒女英雄伝》第27回はまさに主人公玉鳳が安家の一人息子玉格と結婚をする場面であり、花轎の描写が多くみられる。花轎は2人、4人、8人で担ぐものとされているが、8人で担ぐのは最高の花轎で、飾りつけも豪華で裕福な家柄にしか用いられなかった。日本の江戸時代の輿入れの行列のように、花嫁を乗せた花轎の他に、身内が乗った轎や、楽隊などもいっしょに列をなして賑やかに花婿の家まで従った。ちなみに(29)では花轎に乗ることを“上轿”“上了轿”と表現している。現代語の“上车”“上了车”に通じる

17) 文康《兒女英雄伝》下・第27回(1994: 451, 459)。

「乗り込む」意味であり、「乗って移動する“坐”」と区別していると思われる。

“花轿”については、『清俗紀聞』や『北京風俗図譜』にも記述がみられるが、『北京風俗図譜』は、上の《儿女英雄伝》を用例に挙げているので、『清俗紀聞』の例のみ挙げる。

『清俗紀聞』

・嫁迎への項

花轎（かご）は新娘（よめ）の内房口に入れ置く（内房は女の居間なり）。楽人は奥の一間にひかえさせておく。

辞書には“轿”の項に、“轿子”と同様に“花轿”を挙げているものがある¹⁸⁾。上の例でも述べたように古代より引き継がれて庶民の乗り物となり、この“坐花轿”が「輿に腰掛けて乗る」から「移動するものに乗る」、そして「車に乗る」意味に転じたと考えられる。“轿子”の代表的な存在とも受け取れるので特に挙げた。

また、“轿车”は《大词典》では①と②の二つの意味を挙げているが、《现汉》にも同様な説明がある。

“轿车”になると車輪がつき、もはや“轿子”のように人が担いだり、馬がひっぱるものではない。

①供人乘坐的老式车子。车厢外套着帷子，用骡马等拉着走。

（人を乗せる昔の車。車の外側はほろで覆い、ラバや馬に引かせた。）

②供人乘坐的，有固定车顶的汽车（大型的或小型的）。

（人を乗せる車で、天井を固定した箱型の車。（大型や小型のものがある。））

さらに『中国語辞典』（白水社）の“轿”の項目の“轿车”には、「(昔の) 2輪の箱型馬車、箱型自動車、セダン、乗用車」とあり、『中日大辞典』第3版にも「セダン、箱型乗用車」としていることから“轿车”が現代の自動車につながっていることがうかがえる。

18) 《现汉》、《商务馆小学生字典》、《小学生字典》、『中日大辞典』第3版。

5.2.2 椅子駕籠

中に椅子が置かれた「輿」は17世紀には、ロンドンでも使用され、「椅子付きのかご（sedan chair）」として利用された（図6-3参照）。

ロンドンで「椅子付きのかご」が用いられるようになった理由を、R. J. クーツ著（今井宏他訳）（1981：84）では次のように述べている。「当時、近距離の移動には馬や馬車が使われ、長距離には乗合い馬車が使われた。しかし、都市の道路の表面は玉石が敷いてあり、でこぼこして乗り心地が悪いうえ危険でもあった。」これでは人が乗る乗り物としてはあまり歓迎されなかったようである。そこで「椅子駕籠」の登場となるが、おもに金持ちの乗り物として舞踏会やパーティーに利用され、時には「椅子駕籠」の交通渋滞もおきたようだ。

「椅子駕籠」は荷馬車や馬車が行きかう中で、小形で多少乗り心地が良い交通手段として考案され、「新発明の椅子駕籠」と言われた。R. J. ミッチェル著（松村起訳）（1971：241、注49）によると、「一人乗りのかごで、前後からかごかきが担いだが、日本のかごと違って二本の担ぎ棒を腰で支えた。そしてかごの中には椅子がついて坐るようになっていた」とある。

また、ラスロー・タール著（野中邦子訳）の『馬車の歴史』によると、ローマでは交通規制が多く、時には旅行者は徒歩や「輿」、あるいは担い籠でしか市内の通行を許可されなかったとある。同書には、16世紀のローマ皇帝カール5世が「輿」に乗っている図が見られるが、この図では、人ではなく御者が乗った馬の前後に棒が固定されている「輿」である。つまり、人の代りに馬が「輿」を引くのである。

こうして見てくると、「輿」はヨーロッパ全体の主な都市に行き渡っていたと考えられる。しかし、その「椅子駕籠」も19世紀に入ると、道路が舗装され馬車の車体も改善され、辻馬車に取って代わられやがて姿を消したようである¹⁹⁾。

次に、「椅子駕籠」から「セダン」へ移行した過程をみていくことにする。

19) 板倉聖宣（1993：130）。

板倉聖宣(1993)によれば、セダンは〈腰掛ける〉という意味のラテン語からきており、自動車の〈セダン型〉のものは、〈セダン型馬車〉で、その言葉のものは〈椅子駕籠〉である²⁰⁾、としている。また、「セダン」を『英語源辞典』(寺澤芳雄編)で見ると、「1635年を初出年代とし、(17世紀から18世紀に用いられた一人用の)椅子付きのかご、輿(こし)(sedan chair)」とある。もともとはイタリアにあったものをイギリスに持ち込み、「sedan chair」として広まったようである。英和辞典では概して、17~18世紀に用いられた一人用の椅子付きかご、輿を「sedan chair」とし、さらに「sedan」を「セダン型自動車」と記述しているし、『グランドコンサイス英和辞典』に至っては「sedan chair」を「ラテン語の sedere to sitからの造語」としている。

また、ロブシャイドの《英華字典》(1866~69)では、“sedan”を「轎」としている。

“sedan”はセダン型自動車でもあり、17~18世紀の椅子駕籠(sedan chair)であり、「輿」でもある。さらに《英華字典》にあるように中国では「轎」、つまり“轿子”である。

ここまで“轿子”が中国以外に、ヨーロッパでも17世紀から18世紀にかけて用いられていたことを検討してきたが、日本でも「輿」が婚礼用の乗り物として利用されていたことは、江戸時代の皇族や武家の「輿入れ」としてよく知られるところである。ただし、日本の「輿」は、椅子に腰かけるのではなく、直接底面に座るものであった。

同じく座って乗る韓国の「輿」について次に述べよう。

5.2.3 韓国の「輿」

『韓国伝統文化事典』(2006:215)では、「輿」について次のように述べている。

*輿は、かつて人が乗った乗り物の一つである。一般的には小さい家形で、四角い箱型の大きな本体があり、その上を屋根で覆った。本体の前には扉があり、扉から入って中に座る。

20) 同上(1993:121-122)。

“坐”（すわる）が“乘”（乗る）になるまで

* 高句麗古墳の壁画でも派手な輿に座っている婦人の姿が見られることから、三国時代以前からあったと考えられている。

* 民間でも婚姻の日には、新婦は四人が前後で担ぐ^{サインギョ}四人輦に乗った。（図7-3参照）

洪錫謨（1971：270）にも、新婦は屋根の先端を黄銅でつくった八人輦に乗り簾を垂れて行く、とある。

櫻井芳昭（2011：58）によると、「韓国でも4世紀初期の三国時代にはあったと考えられ、その後の新羅王朝、高麗王朝時代にも使われ、李氏朝鮮時代（1392～1910）には、乗る人の身分によって仕様が違うようになり多様化した」とある。また、婚姻用の乗り物としても用いられていた。さらに、「輿には、椅子の形だけで、覆のない藍輿、四本柱を立てて四面に徽章を巡らし、組み立てたり、分解したりして使えるようにした帳歩輦などがあった」としている。

「輿」には座って乗ったとあるが、はたして韓国は日本のように座る文化か。

韓国では床暖房が普及し、朝鮮王朝時代にはオンドル式暖房が一般化され、それに併せて生活様式は座る形に統一された。時代の変化によりオンドルに代って、ボイラーで床下に熱い湯を巡らして部屋全体を暖める方法が用いられ、床に座る生活様式は現代まで続けられている²¹⁾。

座り方として、女性はスカートのような「チマ」を巻いていたので、男性のように膝を組むか（あぐらをかく）、立て膝をしていた。現代でも長いスカートやパンツであれば、膝を組んだり、立て膝をする習慣があるようである。また、朝鮮王朝時代の書堂（私塾）の前で子ども達が正座している姿を見ることができる²²⁾。このことから、韓国でも日本と同じように座る文化であったと言える。

中国の“轿子”はもともと“肩輿”（肩で担ぐ）であり、その伝統が受け

21) 『韓国伝統文化事典』（2006：174）参照。

22) 《韓国学大百科事典》（1972）巻頭掲載写真による。

継がれ“轿子”も肩で担がれた。肩で担ぐ形は日本も同様であるが、韓国では腰の位置で捧げ持ち（図7-3参照）、その様式はロンドンやパリでも同様である。

実は、日本にも手で捧げ持つ「輿」が登場していた。平安末期の「粉河寺縁起」²³⁾や、鎌倉時代の「春日権現験記絵」²⁴⁾、同じく「春日権現験記絵」²⁵⁾、江戸時代の「張州雑誌」²⁶⁾などの図は「輿」を手で捧げ持つ様子が描かれている。さらに、江戸時代の武家の葬儀で、棺の「輿」を手で捧げ持ち、そのうしろを肩で担ぐ「輿」が連なっている図もある²⁷⁾。

また、江戸時代、朝鮮通信使として肩で担がれた「輿」に乗った通信使が描かれている図もある²⁸⁾。これらの図から、日本でも手で捧げ持つ「輿」が用いられ、一方朝鮮では肩で担ぐ「輿」も用いられていたということがうかがわれる²⁹⁾。

櫻井芳昭（2011）は、肩で担ぐ輿は天皇など特別高貴な人を高く掲げて多人数で担ぐもので、最高の支配者（神）を運ぶ用具として意味づけたとしている。さらに、二本の轆を腰の位置で支え持つ輿は、鎌倉時代から戦国期に公家、武家、僧俗などに広く用いられたとしている。お祭りに「御神輿（おみこし）を担ぐ」と言うが、日本ではもともとこの「御神輿」が始まりだったのかもしれない。

“坐”の意味を追うと、次のようになる。

23) 小松茂美編『日本の絵巻』5 粉河寺縁起（1987）参照。出立直前の長者一家の様子を描く。

24) 小松茂美編『続日本の絵巻』13 春日権現験記絵 上（1991）参照。四所明神の輿が興福寺へ来た様子を描く。

25) 同上参照。説法に感じた女が息子を輿に乗せ、興福寺の空晴僧都に入門させる様子を描く。

26) 『張州雑誌』第3巻（張州雑誌23）（1975）参照。東照宮祭の別当尊寿院の輿として描く。

27) シーボルト著、中井・金本訳『シーボルト「日本」』図録・葬儀（1978）参照。

28) 図の説明は櫻井芳昭『輿』（2011：178）参照。

29) 朝鮮通信使ゆかりの町である静岡県清水区が、まちおこしのイベントとして朝鮮通信使の「輿」を再現している。この「輿」は手で捧げ持っている。（2012.11.7民団新聞）

“坐”（すわる）が“乗”（乗る）になるまで

「両膝を地面あるいは敷物の上につけて、ひざまずいた形」（図1）



“榻”のような坐具の上に座ったり腰かける（図3-1、2）



坐具に腰かける。背もたれのある椅子の登場（唐代）（図4-1、2）



馬車に腰かけて乗る（最初は老人や女子が腰掛けていたが、後に男子も腰掛けるようになった）（図5-1、2）（馬車に「腰かける」は“坐”、「のる」は“乗”）



輿にのる（図6-1、2）

“坐轿子”“坐花轿”（明、清代）→“轿车”（セダン）



乗り物に乗る

“坐车”（現代）

おわりに

“坐”はもともと「地面や敷物の上に両膝をひざまずいた形」という意味であった。その「ひざまずいた形」から敷物の上に座る意味になり、その後“榻”や“坐床”のような座具が登場し、地上面に座る習慣から台の上に座る習慣へと変化が起きた。やがて、移動する乗り物として馬車が現れ、兵士や武器の運搬に利用され、のちに一般の馬車としても利用されるようになった。初めは老人や女子が腰掛けて乗っていたが、次第に男子も腰掛けて乗るようになり、馬車以外にも移動手段としてあらたに「腰掛けて乗る」「轿子」が登場した³⁰⁾。その“轿子”のひとつが明、清代の婚礼用として用いられた“花轿”³¹⁾である。さらに西洋から車が入ってきた時、人々はこれを“轿子”の仲間とみて“轿车”と名づけた。

30) 図5、6参照。

31) 図7参照。

ところで、“坐”を「力が抜ける状態」、「身体をじっとしている意味をいかしている」とするネイティブ・スピーカーの“坐”に対する感覚を述べている論文があるので次に紹介しよう。以下は薛鳴（1991：271）の日本語の「のる」と比較した論文である。

日本語の「のる」は、車、バス、電車のような機械で動かすもの、自転車のように自力で動かすもの、馬や象の家畜或いは動物類にのる場合もすべて「のる」である。一方、中国語は乗り物に関しては“乗”を使うが、よく使われるのはむしろ“坐”である。ところが、この“坐”は元の意味の転用³²⁾であり元の意味は日本語の「腰をかける」「坐る」とほぼ同じであるが、それが“乗”のかわりに使われるのは、力が抜ける状態で、身体をじっとしている意味をいかしたように考えられる。

さらに

座席がなくて立っていても“坐车”というのは、じっと動かない意味が生かされ、姿勢的特徴が抑圧されているからである。

とも述べている。つまり、「腰かけた楽な状態を維持したまま対象物体に身をまかせて目的地まで行く」ことに主眼を置いたからこそ、「車に乗る」「坐车」となったのではないか。

中国では乗り物に乗るのは、その中の椅子に座ることであり、本来なら“坐在车上的椅子上”となるところを、“坐车”としたのは全体で部分を代表させるメトニミーの表現である。一方“车”は移動するものである。そこで“坐车”に腰かけて移動する→車に乗って移動する、という意味が生じた。いずれにしても、“坐”が「座る」意味から派生して「ゆったりする、くつろぐ」意味をも含んでいる。“坐”の対象となるものが移動することにより、腰かけてリラックスした状態で目的地まで運ばれる。ここに、“坐”が「座る」から「乗る」意味へと意味拡張し、“轿子”から花嫁の乗る“花轿”へ、さらに現代の車、乗り物全般へと「乗る」意味に発展した根拠をみることができる。

32) 「はじめに」の項で述べた、“把臀部放在椅子、凳子或其他物体上，支持身体重量”の部分を目指す。

“坐”（すわる）が“乘”（乗る）になるまで



図1 跪坐人物像³³⁾

(『中国王朝の至宝』日中国交正常化40周年特別展図録、p.42 B.C.12~B.C.10)

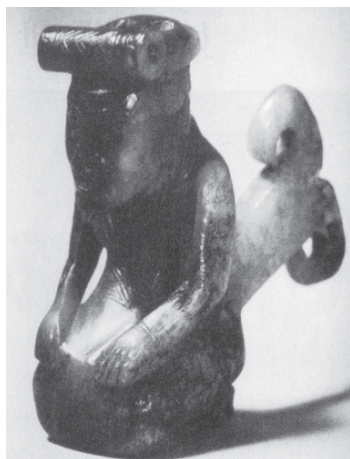


図2 妇好墓出土玉人

(正座する女性の像《中华文明大博览》上、p.72 B.C.13~B.C.11)



図3-1 榻に座る図

(『故宫文物月刊』13、p.61)



図3-2 榻に腰掛ける図

(《中华文明大博览》上、p.162 春秋)

33) 祭祀儀礼用の奴隷、被征服民、犯罪者をかたどったもの。この石像は生贄の代わりに石材でかたちどられたものであり一般の人物像とは異なるが、「跪坐」の形を表している像である。



図4-1 背もたれのある椅子に座る図
（『故宮文物月刊』5、p.79 五代）



図4-2 背もたれのある椅子に腰掛ける図
（《中华文明大博覧》上、p.943 唐）



図5-1 馬車に腰掛ける図
（《三才図会》三・器用五卷、
p.1177 安車³⁴⁾）

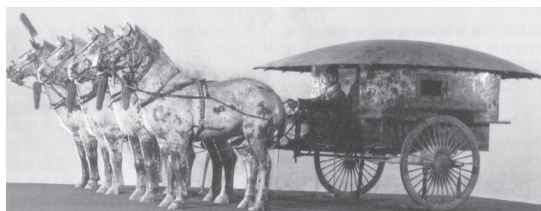


図5-2 馬車に腰掛ける図
（《中华文明大博覧》上、p.298
安車 秦）

34) 「安車」とあることから、乗っている人物は座っていることがうかがえる。

“坐”（すわる）が“乘”（乗る）になるまで



図6-1 輿に乗る図
 (《三才図会》三・器用五卷、p.1178
 大轎³⁵⁾)



図6-2 輿に乗る図
 (《三才図会》三・器用五卷、p.1177
 肩輿³⁶⁾)



図6-3 輿に乗る図
 (『日本史再発見』 p.121、セダと呼ばれたロンドンの椅子駕籠 1634)

35) 大官の乗るりっぱな輿 (『大漢和』)。

36) 二人で肩にかつぐかご (『大漢和』)。



図7-1 婚礼時に新婦が乗る輿
“花轿”（中国）
（荒川清秀氏提供、
上海近郊の水郷の村 1997）



図7-2 婚礼時に新婦が乗る輿
“花轿”（中国）
（荒川清秀氏提供）



図7-3 婚礼時に新婦が乗る輿
（韓国）
（『韓国伝統文化事典』p. 215）

参考文献

〈日本文献〉

- 秋田成明編訳（1966）『中国社会風俗史』東洋文庫，平凡社
尹瑞石著，佐々木道雄訳（2005）『韓国食生活文化の歴史』明石書店
板倉聖宣（1993）『日本史再発見—理系の視点から—』朝日選書，朝日新聞社
内田道夫編（1964）『北京風俗図譜』東洋文庫，平凡社
奥野信太郎他訳（1961）『兒女英雄伝』下（中国古典文学全集第30巻）平凡社
『漢文大系』第17巻（礼記鄭注）（1914）富山房
洪錫謨他，姜在彦訳注（1971）『朝鮮歳時記』東洋文庫，平凡社
『故宮文物月刊』5（1983）国立故宮博物院
『故宮文物月刊』13（1984）国立故宮博物院
『国訳漢文大成・経子史部』第19巻（1956）東洋文化協会
小松茂美編（1987）『日本の絵巻』5 粉河寺縁起，中央公論社
小松茂美編（1991）『続日本の絵巻』13 春日権現験記絵 上，中央公論社
櫻井芳昭（2011）『輿』（ものと人間の文化史156）法政大学出版局
佐藤明（1981）『新書』容経篇について』九州大学学術情報リポジトリ 中国哲学論集7
清水茂（1974）『中国文明選』第7巻 顧炎武集，朝日新聞社
徐光冀総監修，古田真一監修・翻訳（2012）『中国出土壁画全集』5巻，科学出版社
薛鳴（1991）「日中両語の意味範囲に関する諸問題」『日本語教育論集』学研
『続国訳漢文大成』文学部13～17巻上（1929～1931）国民文庫刊行会
竹内照夫（1971）『新釈漢文大系』礼記 上・中，明治書院
『中国王朝の至宝』日中国交正常化40周年特別展（2012）
辻幸夫（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社
中川忠英（1966）『清俗紀聞』東洋文庫，平凡社
長澤規矩也（1980）『和刻本辞書字典集成』第1巻，汲古書院
仲田定之助（1969）『明治商売往来』青蛙房
『張州雑誌』第3巻（1975）名古屋市蓬左文庫蔵，愛知県郷土資料刊行会
フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著，中井晶夫・金本正之訳（1978）『シーボルト
「日本」』図録第2巻，雄松堂書店
藤田豊八著，池内宏編（1974）『東西交渉史の研究 西域篇』国書刊行会
フローレンス・ド・ダンピエール著，三家礼子・落合信寿・小山秀紀訳（2009）『椅子の文
化図鑑』東洋書林
マカートニー著，坂野正高訳注（1975）『中国訪問使節日記』東洋文庫，平凡社
目加田誠（1976）『新釈漢文大系』世説新語 中，明治書院
R. J. ミッチェル・M. D. R. リーズ著，松村超訳（1971）『ロンドン庶民生活史』みすず書
房
R. J. クーツ著，今井宏他訳（1981）『イギリス—その人々の歴史』（全訳世界の歴史教科書
シリーズ4）帝国書院
ラスロー・タール著，野中邦子訳（1991）『馬車の歴史』平凡社

〈中国文献〉

- 王圻纂輯 (1970) 《三才図会》一, 成文出版社, 原本1607刊
賈誼撰 (1968) 《賈子新書》下 (国学基本叢書, 王雲五主編) 台湾商務印書館
賈誼撰 (1968) 《新書》二, 抱經堂叢書 (百部叢書集成) 芸文印書館
顧炎武 (1933) 《日知録》下 (国学基本叢書) 商務印書館
黄汝成 (1990) 《日知録集釋》(下卷之二十八坐) 花山文芸出版社
司馬遷 (1988) 《史記》卷六十八商君伝 (《影印文淵閣四庫全書》第244冊) 驪江出版社
四部叢刊電子版 (2001) 北京書同文数字化技術有限公司
陳澧注 (1984) 《礼記集說》(《四書五經》中) 中国書店
陳寿撰, 裴松之注 (1997) 《三国志》(《後漢書・三国志》) 中華書局
文康 (1994) 《兒女英雄伝》下 (清代世情系列) 花山文芸出版社
李昉 (1935) 《太平御覽》五, 台湾商務印書館
劉熙撰 (1966) 《釈名》卷三 (叢書集成簡編, 王雲五主編) 台湾商務印書館
劉義慶撰 (1967) 《世說新語》上, 芸文印書館
李秀山 (2001) 《中国家具史图說》湖北美術出版社
李默主編 (1997) 《中华文明大博覧》上, 广东旅游出版社

〈日本語辞書〉

- 『英単語の語源を知り語彙を増やすためのラテン語・日本語・派生英語辞典』(2006) 国際語学社
國原吉之助 (2005) 『古典ラテン語辞典』大学書林
『グランドコンサイス英和辞典』(2001) 三省堂
『新英和大辞典』第6版 (2002) 研究社
『大漢和辞典』修訂第2版 (1989-1990) 大修館書店 (初版1955)
『大辞泉』増補・新装版 (1998) 小学館
『中日大辞典』第3版 (2010) 大修館書店
寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』研究社
水谷智洋編 (2009) 『羅和辞典』改訂版, 研究社 (初版1952)
三橋広夫・趙完濟訳, 国立国語院編 (2006) 『韓国伝統文化事典』教育出版
『老舎事典』(1988) 大修館書店
『リーダーズ英中和辞典』(2000) 研究社

〈中国語辞書〉

- 《汉语大词典》(1986-1994) 汉语大词典出版社
许嘉璐主編 (1991) 《中国古代礼俗辞典》中国友谊出版公司
《现代汉语词典》第6版 (2012) 商务印书馆
皇甫謐撰 (1971) 《叢書集成續編》高士伝, 藝文印書館
《古汉语常用字字典》第4版 (2011) 商务印书馆
《小学生字典》(2001) 商务印书馆国际有限公司
《商务馆小学生字典》(2007) 商务印书馆出版
《說文解字注》(1988) 上海古籍出版社
ロブシャイド著, 那須雅之解説 (1996) 《英華字典》東京美華 (1866-1869年出版の復刻)

“坐”（すわる）が“乘”（乗る）になるまで

〈その他の辞書〉

《韓国学大百科事典》（1972）乙酉文化社

古橋ふみ子 Furuhashi Fumiko 愛知大学大学院